



医学科長退任の御挨拶

『医学科長退任に当たって』

顎顔面口腔機能再建学講座 教授 砂 川

元

平成20年4月、佐藤良也教授が医学部長に就任した。その佐藤医学部長から医学科長就任への話が来た。佐藤教授が医学部長として最適任であると考えて推薦した責任上、「お役に立てれば」との思いであった。当時はまだ、大学院医学研究科として部局化はしておらず、医学部は医学科と保健学科の両学科から組織されており、医学科は医学科内の予算や教員人事、医学科の入学試験から学生の教務、厚生などを担っていた。それ故、医学科長はそれなりの重責であることは承知していたが、有能な佐藤医学部長の補佐であればとの気持ちで引き受けさせて頂いた。これらの中、特に小生が関わった医学科運営会議と入試委員会について記してみたい。

まず医学科長に就任して感じたことは、会議が多く、そのいずれにも出席することが職務であると云うことであった。毎週水曜日13:00からの医学科運営会議や教授会の議題調整に加えて、第2水曜日の医学科運営会議、第4水曜日の教授会はもちろんであった。水曜日は歯科口腔外科の手術日であり、長時間に及ぶ「口腔がん患者の手術」の日程調整に加え、多くの所属学会で水曜日に開催されていた理事会、評議員会などは欠席せざるを得ないことが多かった。

平成20～22年度の三年間の中、最初の二年間の医学科運営会議では、教員人事、特に教授選考（臨床では泌尿器科、二内科、三内科、脳外科、基礎では薬理学、生理学の6名）が印象的であった。選考過程では、業績、人物、臨床にあっては臨床能力など多くの議論があり、紆余曲折はあったものの若手の優秀な先生方が選考されたものと思っている。この6名の先生方は、現在では臨床・教育・研究や組織運営などに対して、すでにご活躍であることから評価されるものと思っている。

一方、入試関連では、11月の学士入学、12月の「地域枠の推薦Ⅱ」に始まり、2月・3月の前期・後期日程、帰国子女、私費外国人など多彩な入学者選抜があり、それに対する入試体制（問題作成や面接などの委員）や選抜要項などを決定する入試委員会が年度初めから開催される。入試体制に関しては、多くの先生方に公平に委員を務めてもらうということが主であり、優秀な先生方が多いことから苦労は少なかった。しかし、この中でも、入試日が近くなつてから面接委員を辞退される方がおられたことは残念で

あった。この面接委員の辞退と同様に、入試合否判定会議の定足数確保に対しても、佐藤医学部長共々、年度末に頭を悩ませる最大の課題であった。

入試は、優秀で、モチベーションの高い学生を選抜するという大学にとって誠に重要な業務である。それ故、従来は非定期的（入試関連の議題がある時のみ日程調整をして開催していた）な会議であったが、第4水曜日、定例教授会の前に開催すべく定例化した。それに伴って、今後の入試体制や業務、あるいは学士入学、帰国子女、私費外国人留学生などに対する選抜方法などについての議論が活発になるものと期待している。

難関な入試を突破した医学科学生にとって、入学後の最大の関心事は、まず医師国家試験の合格と医師としての資質を身につける学習であろう。そのために6年間の学習カリキュラムや学生生活に対する厚生補導に関して議論する教務、厚生委員会の役割は重要であると考えられる。この教務と厚生に関しては、石田教務委員長の下で、特に国試合格率の向上、地域枠学生へのカリキュラムなどが、教務委員会と医学教育企画室との連携で充実されるものと期待している。また、厚生に関しても高山厚生委員長の下で、より良い学生生活が過ごせるような体制を目指して努力されている。これら教務、厚生委員会に関与することが少なかった小生であるが、特に臨床実習におけるクリニカル・クラークシップの充実と実習期間の延長が、むしろ国試合格率の向上に必要ではないかと思っている。

さて医学科同窓会報誌「南風」に「医学科長退任に当たって」との寄稿を要請されたが、本拙文が果たして医学科学生や同窓生に対して適切であったかどうか甚だ心許ない。思いのままに書いてしまったが、ご容赦願いたい。

医学科長退任に当たり、この3年間、何とか職責を果たせたのは、医学部長として見事な舵取りをし、医学科を大学院医学研究科として部局化を果たしつつ発展させた佐藤良也前医学部長と医学科運営会議構成員の先生方の絶大なるご協力・ご指導の賜であり、深甚なる感謝を申し上げると同時に、医学科学生や同窓会の皆様のご協力にもお礼を述べたいと思う。琉大医学部ならびに医学科同窓会のますますのご発展を祈念いたしております。ありがとうございました。